

会館使用料モデル①

部屋 (㎡)	使用料		
	午前	午後	夜間
25	600	600	600
50	800	1000	1000

会館使用料モデル②

部屋 (㎡)	使用料			
	9:00~12:00	12:30~15:15	15:30~18:15	18:30~21:30
25	600	600	600	600
50	1000	1000	1000	1000

表 (オ) 利用率、利用モデルによる年間使用料収入の試算



利用 率(%)	会館使用料モデル①		会館使用料モデル②	
	金額	回数	金額	回数
10	240,900	329	321,200	438
15	361,350	493	481,800	657
20	481,800	657	642,400	876
30	722,700	986	963,600	1,314
40	963,600	1,314	1,284,800	1,752
50	1,204,500	1,643	1,606,000	2,190

表 (カ) 損益分岐点利用率計算 (年間事業収益 5 万円と設定)

設定額	内 容	損益分岐点利用率(%)	
		モデル①	モデル②
300,000	(a)+(b)	12	9
550,000	(a)+(b)+(c)	23	17
1,050,000	(a)+(b)+(c)+(d)	44	33



そこで、それぞれの会議室利用率と時間帯 - 使用料モデル設定の場合の年間使用料収入を計算すると表 (オ) の通りとなります。

使用料収入以外の事業収益を 5 万円として、損益分岐点利用率を計算すると表 (カ) の通りとなります。それぞれの設定額を達成するために、最低限必要な利用率 (損益分岐点) が示されています。例えば、モデル②の場合、ランニングコストをカバーするためには、9%、減価償

却費も含めてカバーするには 33% の利用率を確保する必要があります。それにもとづいて色分けしたのが表 (オ) となるわけです。

一番濃く色分けした部分は、会館運営費と水道光熱費の合計額 (いわゆるランニングコスト) の 30 万円に、モデル①の場合は届きませんから、単年度でも赤字になることを示しています。

次に濃く色分けした部分は、ランニングコストはカバーできていますが、修繕